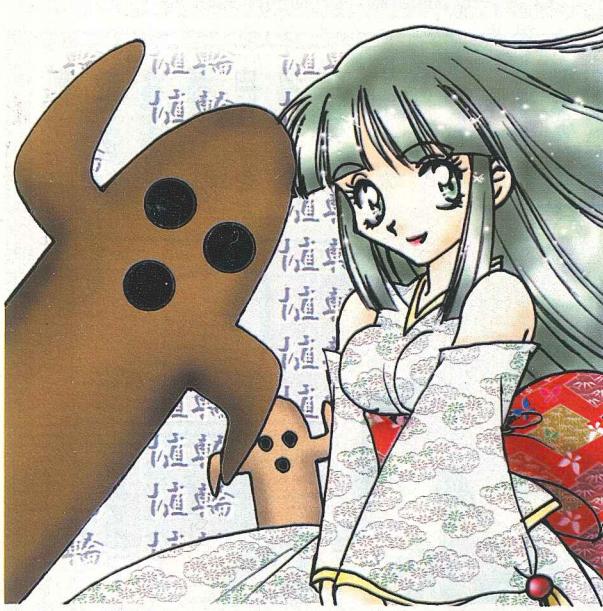


井上逸兵のしましまにしまつしま!

いのうえいっべい(脚本家)



illustrated by MIYATA NAOMI

僕には思える。
かよくわからないけれど、僕たちはそれを使
ことばもある意味でそうだ。長い間使い続
けられてきて、少しづつは変わっていくんだ
けれどなかなか変わらない、変えられない部
分もある。昔の人がどういうつもりでこんな
言い方をしたのか、こんなことばを作ったの
は中国で竜=皇帝に例
えられたらしい)。

こういうことはもちろん別に悪いことじゃない。むしろおもしろ
いし、長い時間を経て
いることに思いを馳せると貴いもののように

以前 日本の某国営放送のテレビで「アニメーションの昭和史」という番組をやつていた。アニメのシリアルがアニメ雑誌にコラムを連載することになっていたので、少しは勉強しようと思つて見ていた。なかなかカタイ話のドキュメントリーだった。あんな頃から（どれくらい前かよく憶えてないけど、とにかくずいぶん前だった）一所懸命アニメづくりをしている人がいたのかと驚きもした。

僕は外国のアニメはディズニーのとかテレビでちよこつと放送される程度のものをちょっと見たことがある程度だけれど（日本のアニメには見てないけれど）、日本のアニメの品格というか特有の美的センスというのはあの頃生まれ、育てられてきたもののように感じた。今現在の僕たちはあまり気づいていないかもしないけど、長い間栽培されてきたものは簡単にはなくならないものだ。それが伝統というものだろう。

ことばもある意味でそうだ。長い間使い続けられてきて、少しづつは変わっていくんだけれどなかなか変わらない、変えられない部分もある。昔の人がどういうつもりでこんな虫へんなんだろうって考えたことある？ あんなのどう見たって虫じやない。でもいのちもある。なんかかえる(蛙)やへび(蛇)は虫へんなんだろうって考えたことある？ はわかるような気もする。「猪」や「猫」のへんは「ケモノ」へんだ。つまり「獸」というのはひょつとして後から当た字で、ほんとは「毛モノ」つまり「毛が生えた生き物」だったんだね。そう考えると虫への動物はつまるところ「毛のない生き物」のグループだと昔の人たちは考えていたのかもしれない(ちなみに「虹」は中国で竜=皇帝に例えられたらしい)。

こういうことはもちろん別に悪いことじゃない。むしろおもしろいし、長い時間を経ていることに思いを馳せると貴いもののように

い続けている。この場合は伝統ということはあるにふさわしくないけれど、とにかく僕たちが前の世代から引き継いだものだ。世の中がめまぐるしく新しくなつて、それに追いついていかないことにことばはそれに追いついていかないことを言い表すために新しいことばもめまぐるしくできる。ところが世の中が変わっているのにことばはそれに追いついていかないことがある。僕が小学校の頃、学校へ行くとまず靴は「ゲタ箱」に入れたものだった。でも「ゲタ」で学校に来て、「ゲタ箱」に入るやつはいなかつた。電車やバスに乗ると、「つり革」におつかまりください、といわれたりするが、「革」でできた「つり革」なんて今時どこかにあらんだろうか。みんなビニールか何かでできている。「もの」は変わつてもなかなかことばは変えられないのだ。

あまり気づかないところで、実はある区別をしていて、それをずっと続けていたりすることもある。なんかかえる(蛙)やへび(蛇)は虫じやない(猪)やねこ(猫)と比べてみるとちょっとわかるような気もする。「猪」や「猫」のへんは「ケモノ」へんだ。つまり「獸」というのはひょつとして後から当た字で、ほんとは「毛モノ」つまり「毛が生えた生き物」だったんだね。そう考えると虫への動物はつまるところ「毛のない生き物」のグループだと昔の人たちは考えていたのかもしれない(ちなみに「虹」は中国で竜=皇帝に例えられたらしい)。

時が流れても変わらないもの